

地 引 御 書

弘安四年十一月二五日 六〇歳

坊は十間四面に、またひさし^底さしてつくりあげ、二十四日に大師講並びに延年、心のごとくつかまつりて、二十四日の戌亥の時、御所にす^{いぬい}ゑして、三十余人をもつて一日^書経かきまいらせ、並びに申^{さるとり}酉の刻に御供養すこしも事ゆへなし。坊は地^引ひき、山づくり候ひしに、山に二十四日、一日もかた時も雨ふる事なし。十一月ついたちの日、せうばうつくり、馬^屋やつくる。八日は大坊のはしら^柱だて、九月十日^暮ふき候ひ了んぬ。しかるに七日は大雨、八日九日十日はくもりて、しかもあたゝかなる事春の終はりのごとし。十一日より十四日までは大雨ふり、大雪^ふ下りて、今に里にきへず。山は一丈二丈雪^凍こほりて、かたき事かねのごとし。二十三日・四日は又そらは^空はれてさむからず。人のまいる事、洛中かまぐら^{さるとり}のまちの申酉の時のごとし。さだめて子細あるべきか。

次郎殿等の御^公きうだち、を^達やの^親をほせと申し、我が心にいれてをはします事なれば、われと地をひき、はしら^柱をたて、とうひやうえ・むまの^藤入道・三郎^{兵衛}尉等已下の人々、一人もそらくの^疎ぎなし。坊はかまぐらにては一千^貫貫にても大事とこそ申し候へ。たゞし一日経は供養しさして候。其の故は御所念の叶はせ給ひて候ならば供養しはて候はん。なにと申して候とも、御^祈ねんかなはずば、^念言のみ有りて実なく、華さいてこの^果みなからんか。いまも御らんぜよ。此の事叶はずば、今度法華経にては仏になるまじきかと存じ候はん。叶ひて候はゞ、二人よりあひまいらせて、供養しはてまいらせ候はん。神^習ならはすはねぎ^祢からと申す。此の事叶はずば法華経信じてなにかせん。事々又々申すべく候。恐々。

十一月廿五日

日 蓮 花 押

南 部 六 郎 殿